# TOP Collection Eugène Atget: The Eternal Inspiration

Dec. 2, 2017—Jan. 28, 2018

The Tokyo Photographic Art Museum is delighted to present TOP Collection—Eugène Atget: The Eternal Inspiration. It follows several earlier exhibitions in which we introduced the photographer Eugène Atget from a variety of angles, including two in which he was the primary focus.

The first of those two exhibitions, held in 1992, was The Paris of Atget, Man Ray, and Brassaï: Photography, 1920-1940. It explored the flowering of photography as a means of creative expression adopted by avant-garde artists, concentrating specifically on Atget's contemporaries. The second was Eugène Atget—A Retrospective: An Intimate View of Paris at the Turn of the Century. Held in 1998, that Atget solo exhibition presented Atget as a creative photographer, an artist in his own right. With works in our collection supplemented by others on loan from the Musée Carnavalet in Paris, the New York Museum of Modern Art (MoMA), and other museums overseas, the exhibition presented a comprehensive view of what makes Atget's work so compelling.

While those exhibitions focused on Atget's presence as a photographer for whom Paris was his stage, Eugène Atget: The Eternal Inspiration shifts the main stage to the United States and emphasizes how the Atget story unfolded there. Atget was almost unknown in his lifetime. Posthumously, however, he acquired a strikingly important position in the history of photography as "the father of modern photography." The Americans Man Ray, Berenice Abbott, Julien Levy, John Szarkowski, and the New York Museum of Modern Art, which chose Szarkowski as director of its photography department, played vital roles in transforming and elevating Atget's status. The efforts of those individuals and of MoMA focused on Atget as an artist and ultimately led to attempts to elucidate the distinctive nature of photography as an artistic medium. Through their delineation of those distinctive characteristics, the Atget advocates drew the connections between Atget and the next generation of photographers, allowing a genealogy of modern photography to emerge.

This exhibition presents a subset of the photographs by Atget that our museum collected from the late 1980s to the latter half of the 1990s as well as work by Atget's predecessors and contemporaries and by post-Atget American and Japanese photographers. Through them, it explores the qualities and magnetism unique to photography.

## Part 1: Atget's Enduring Legacy—Man Ray, Berenice Abbott, Julien Levy

Eugène Atget used an old fashioned large-format camera to follow his own inclinations and document in detail the streets of Paris in the late nineteenth and early twentieth centuries. He photographed not only all of the city's twenty arrondissements but also its outskirts and the lives of the poor who lived there.

Near the end of his life, Atget met Man Ray, Berenice Abbott, and Julien Levy, the three individuals who played key roles in introducing his photographs to the world as works of art. Man Ray first recognized that Atget was an artist. Abbott did more than anyone else to publicize his art, dedicating half her life to promoting Atget's work. Levy exhibited Atget's work at his gallery in New York and took advantage of his extensive connections to build awareness of it.

The efforts of Ray, Abbott and Levy resulted in the remarkable posthumous rise in Atget's reputation in the United States, which, from the 1930s on, was rapidly becoming a center for the global art world. Their efforts on behalf of Atget contributed to the formation of Modern Photography as a framing moment in photography's history.

## Part 2: Atget's Precursors and Contemporaries —Le Secq, Marville and Stieglitz

Atget's precursors in using photography to document the city included Jean-Louis-Henri Le Secq and Charles Marville. Starting in the 1850s, they were commissioned by the governments of France and the City of Paris to create an official photographic record of historic buildings and changes in the city's appearance.

Atget began taking his photographs at the end of the 1890s, just before the start of a new century. His work spanned the transition from Pictorialism to Modern Photography. Modernism in photography had also appeared in America, in the work of Alfred Stieglitz, who pursued a style of photography rooted in photography's unique character.

## Part 3: Atget as the Father of Modern Photography —MoMA and John Szarkowski

In 1940 the New York Museum of Modern Art (MoMA) created the museum world's first department dedicated to photography. Then, in 1962, John Szarkowski was chosen to succeed Edward Steichen as the department's director. In 1967 MoMA at last acquired the Abbott/Levy Collection of Atget's photographs, more than thirty years after Levy and Atget began trying to sell the collection to the museum in 1930. From 1981 to 1985, MoMA organized a series of four "The Work of Atget" exhibitions. Both the exhibitions and their catalogues were the result of extraordinary research and analysis.

Under Szarkowski's leadership, MoMA's photography department had already positioned Gary Winograd, Lee Friedlander,, and Diane Arbus as the leaders of a new wave in Straight photography in its "New Documents" exhibition in 1967. It had then gone on to produce "New Japanese Photography," the first exhibition to introduce avant-garde Japanese photographers to America in 1974. These and other outstanding exhibitions strengthened the claim of snapshot aesthetics and documentary style as the primary directions of Modern Photography and laid the foundations for Eugène Atget being positioned as "the father of Modern Photography" in the movement's genealogy. The legend they created established Atget's enduring reputation.

TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

TOP Collection

# アジェのインスピレーション
# ひきつがれる精神

TOP Collection　Eugène Atget: The Eternal Inspiration

2017 年、12 月 2 日（土）～2018 年 1 月 28 日（日）

ウジェーヌ・アジェ《日食の間》
1912 年
ゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館では開館当初からウジェーヌ・アジェ作品を収集し、現在 150 点をコレクションしています。これまで様々な切り口でアジェの作品を紹介してきましたが、本展では、アジェがこの世に遺した 20 世紀前後に捉えたパリの光景の写真が、なぜ現在も多くの写真家たちに影響を与え、魅了してやまないかを考察します。20 世紀から現在に至るまで長きに渡って受け継がれてきたアジェのスピリットとはいったい何なのでしょうか。当館の約 3 万 4000 点を誇る多彩なコレクションより、アジェ自身の作品と 20 世紀から現代に至るまでの作家たちの作品、そして写真集や資料等によって検証します。

## 出品作家

ウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、シャルル･マルヴィル、アルフレッド・スティーグリッツ、ベレニス・アボット、ウォーカー・エヴァンズ、リー・フリードランダー、ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック、荒木経惟、森山大道、深瀬昌久、清野賀子（12 作家）

## 出品点数

作品 158 点 および図書資料

## 写真の歴史に燦然と輝く、ウジェーヌ・アジェの功績

本展覧会はフランスの写真家、ウジェーヌ・アジェ(1857-1927)が後世の写真表現にどのような影響を与えたかについて考えます。当館所蔵の作品と写真集などの資料によって、アジェ自身の作品とアジェ以降の写真家たちの際立った作品を中心に、その輪郭を浮び上がらせようとするものです。

ウジェーヌ・アジェは19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリとその周辺を捉えた写真家です。1898年、41歳の時から30年間にわたって8,000枚以上の写真を撮影し、歴史的建造物や古い街並み、店先や室内、看板、公園、路上で働く人々など、近代化が進み、消えゆく運命にあった「古きパリ」を体系的に記録し、図書館や美術館、博物館などの公的機関や画家、建築家等のアーティストたちに販売しました。その顧客にはレオナール・フジタもいます。

## 晩年から没後に評価されたアジェ

マン・レイ 《醒めて見る夢の会》 1924年
ゼラチン・シルバー・プリント

アジェは孤高の写真家と称されることも多く、ひとり黙々と撮影に取り組みましたが、亡くなる2年前頃よりにわかに注目されはじめます。偶然にも、同じ通りにスタジオを持っていたマン・レイがアジェの写真からシュルレアリストと共通するものを感じ取り、『シュルレアリスム革命』誌に取り上げたのです。この頃から、アジェの作家性にスポットライトが当たりはじめました。

さらに、当時、マン・レイの助手をしていたベレニス・アボットによって、アジェの存在は世界に波及していきます。アジェの死後、散逸の危機にあったプリントやガラス乾板を、もうひとりの貢献者であるニューヨークのギャラリスト、ジュリアン・レヴィの助けを借りて買い取り、アメリカで広めていったのです。その後、写真史家や美術館のキュレーターたちによって研究が進められ、アジェは近代写真の先駆者として位置づけられていきます。

## 多くのアーティストに影響を与えたアジェ その謎はいまだ多い

しかしながら、アジェはいまだに謎めいたところのある写真家です。ニューヨーク近代美術館写真部門のディレクターだったジョン・シャーカフスキーは「ウジェーヌ・アジェ[･･･]、その人物について、我われには、わずかに信頼できる一握りの事実があるだけだ。それらはおおよそ不透明であいまいなもので、研究者たちは、そのことをきびしく穿鑿(せんさく)してきたが、そのほとんどは分からずじまいであった」(ジョン・シャーカフスキー「序文」『ウジェーヌ・アジェ写真集』[原信田実訳、岩波書店、2004]と、かつて述べているように、生前のアジェ自身のコメントがあまり残されていないこともあり、彼の作品について多くの人たちが様々な想像を巡らせ、その真実に迫ろうとしてきました。

アジェに憧憬を抱き、手本としてきた写真家たちは後を絶ちませんが、彼らがアジェの写真に見出したものはいったいなんだったのか。本展は、アジェの同時代の写真表現と、アジェの先達となる写真家の作品も併せて展示し、紐解こうとするものです。

# ウジェーヌ・アジェ　略歴

1857 年、フランス南西部リブルヌに生まれる。幼い頃に両親を亡くして孤児となる。
1879 年、パリ国立演劇学校に入学するが、翌年、兵役のため中退。
1887 年頃にフランス北部ソンムに移り住む。写真を始めたのはこの頃と推測される。
1890 年初頭、パリに戻ったアジェは、アパートのドアに「芸術家のための資料」という看板を掲げて写真を売り始めた。その中で、19 世紀に世界の首都として繁栄を極めたパリの古き良き部分が、次第に失われてゆくのを目の当たりにし、1890 年の終わり頃から写真によるパリのコレクションを始める。
1925 年、マン･レイとそのアシスタントであったベレニス･アボット（1898-1991）と出会う。
1926 年、『シュルレアリスム革命』誌の 7 号と 8 号に、アジェの写真が掲載される。
1927 年没。
1928 年、アボットが散逸を恐れ 1787 枚の原版と 1 万枚のプリントを、ジュリアン・レヴィのサポートを受けて購入。その後、ふたりはアジェの紹介に努めた。
1964 年、アボットが写真集『The World of Atget』（Horizon Press Publishers）を出版。
1968 年、ニューヨーク近代美術館が、アボット＝レヴィ・コレクションを購入。
1981-85 年、ニューヨーク近代美術館が、4 回シリーズで回顧展を開催。

＜左上＞ウジェーヌ・アジェ《ショワジー館、バルベット通り 8 番地》 1901 年　鶏卵紙　＜右上＞ウジェーヌ・アジェ 《トリニ館、ケ・ダンジュ通り 11 番地》 1902 年　鶏卵紙　＜左下＞ウジェーヌ・アジェ 《(樹)》 1910-20 年　油彩／カンヴァス（厚紙に貼付）　＜右下＞ウジェーヌ・アジェ《フルーリー通り 76 番地、シャペル大通り》1921 年　ゼラチン塩化銀紙（P.O.P）

# アジェを評価した４人のキー・パーソン

## アジェの才能を見いだした
## *マン・レイ*

シュルレアリスムの鬼才、マン・レイ（1890-1976）。パリのモンパルナスにスタジオを構え、偶然にもアジェのスタジオのあるアパルトマンと同じストリートだった。1925 年にアジェのスタジオを訪れ、40 枚ほど写真を購入した。

彼がアジェと出会った頃は、カメラの技術革新や印刷技術の向上が著しく、新たなフォト・ジャーナリズムの展開やモダニズム的な考え方が台頭していった。そうした時代の変革と表現におけるムーブメントの中、マン・レイは、アジェの写真によるパリのコレクションにいち早く作家性を見いだす。マン・レイが購入した写真群は、まもなく、シュルレアリスト仲間や当時、マン・レイのアシスタントをしていたベレニス・アボットにも広がっていく。

マン・レイ　《セルフ・ポートレイト》
1932 年　ゼラチン・シルバー・プリント

## アジェに傾倒　作品の購入・管理・出版に力を尽くした
## *ベレニス・アボット*

ベレニス・アボット（1898-1991）は、マン・レイのアトリエで目にしたアジェの写真に魅了され、少ない収入の中から作品を購入するようになる。アジェの写真はシュルレアリストの機関紙『シュルレアリスム革命』の第 7 号に 3 枚、第 8 号に 1 枚の写真が掲載された。1927 年のアジェの死後、アボットは散逸の危機にあった作品を購入・管理し、出版やプリント制作に尽力するなど、自身の作品制作と同じく、アジェの作品とかかわっていく。

1964 年にアボット編集・執筆による写真集『The World of Atget』（ホライズン・プレス）を出版。

アボットは、アジェが行った都市の記録をニューヨークで再現したいと考え、1935 年にプロジェクトを開始、1939 年に『変わりゆくニューヨーク』（Hazan）を出版した。

ベレニス・アボット　《ウォーター・フロント》〈変わりゆくニューヨーク〉より
1938 年　ゼラチン・シルバー・プリント

## アジェをいち早くアメリカで紹介した写真ギャラリスト
## *ジュリアン・レヴィ*

『シュルレアリスム革命』誌でアジェの写真を見て以来、信望者のごとく虜となったジュリアン・レヴィ（1910—1980）は、アジェ本人から多くの写真を購入した。アジェと出会った頃のレヴィは、ハーバード大学を中退して渡仏、パリでシュルレアリストたちと交流していた。やがてニューヨークでギャラリストになることを決意。世界恐慌の余波はあったものの、1929 年にニューヨーク近代美術館（MoMA）がオープンするなど、ニューヨークは新しいものが生まれる機運があった。レヴィは帰国後すぐに写真プリント専門のギャラリーに勤務し、そこでアジェの作品をはじめて紹介する。1931 年には自身のジュリアン・レヴィ・ギャラリーをオープンし、写真をファインアートとして扱うギャラリストのパイオニアとなった。

アボットがパリから持ち帰り、自身も共同出資したアジェ作品一式を MoMA に販売しようと試みたが、1930 年代はまだ写真が絵画と同様に美術館のコレクションになるという価値観が育っていなかった。その後、同作品は 1969 年に MoMA が購入する。

## アジェを近代写真の始点と位置づけ“巨匠”と知らしめた
## MoMA 写真部門ディレクター
## *ジョン・シャーコフスキー*

ジョン・シャーコフスキー（1925-2007）は、1962 年、当時の MoMA（ニューヨーク近代美術館）の写真部門ディレクターであった写真家エドワード・スタイケンに、後任として引き抜かれた。

シャーコフスキーは、ヴァナキュラー（vernacular）と呼ばれる、地域に特有なものや土地の日常的なものに感心を寄せる写真家、ありふれた風景を昇華させるような写真家に惹かれた。そして、アジェを近代写真の始点と位置づけ、ウォーカー・エヴァンズや、ゲイリー・ウィノグランドという新しく出てきたアメリカの写真家たちとリンクさせ、写真史の大きな流れを創りだした。1969 年、ゲイリー・ウィノグランド、リー・フリードランダー、ダイアン・アーバスを取り上げた「ニュー・ドキュメンツ」展はその象徴であった。

そして、シャーコフスキー率いる MoMA の写真部門が 1981 から 1985 年に開催したアジェの 4 つの展覧会「The Work of Atget」と、美しくまとめられた 4 分冊の展覧会カタログによって、アジェは巨匠と認識される作家となった。アジェ作品は金銭的にも高く評価され、その地位を不動のものとした。

「The Work of Atget」Vol.I-Vol.IV （参考図版）

受け継がれてきた、アジェのスピリット。

当館の多彩なコレクションから
20 世紀から現代まで、さまざまな作家を紹介します。

シャルル・マルヴィル《パリ市庁舎、パリコミューンの前》　1871 年　鶏卵紙

アルフレッド・スティーグリッツ《三等船室》
1907 年　フォト・グラビア印刷

ウォーカー・エヴァンズ《写真家のウィンドウディスプレイ、バーミンガム洲、アラバマ》
1936 年　ゼラチン・シルバー・プリント

リー・フリードランダー《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ州》　1983 年
ゼラチン・シルバー・プリント (参考図版)

ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック《パリ、ノートルダム寺院》1851 年
単塩紙

荒木経惟　〈写真論〉より　1988-89 年
ゼラチン・シルバー・プリント

森山大道　《ポスター(中野)》〈東京〉より
1968-80 年　ゼラチン・シルバー・プリント

深瀬昌久　《襟裳岬》〈鴉〉より　1976 年
ゼラチン・シルバー・プリント

清野賀子　〈Untitled〉より　1999 年
《館山、千葉》　発色現像方式印画

## ジャン＝ルイ・アンリ・ル・セック (1818-82)

19 世紀フランスの建築写真家。1840 年代初めに画家ポール・ドラロッシュの下で絵画を学ぶ。同じく写真家として著名なギュスターヴ・ル・グレイが同門におり、彼の薦めで写真に転向した。51 年に「ソシエテ・エリオグラフィーク」の設立メンバーとなる。同年フランス政府が設立した歴史的記念物委員会に撮影を依頼され、数多くの歴史的建造物を撮影した。教会建築、教会彫刻の撮影で知られるとともに、カロタイプ技法の改良（フレンチ・カロタイプの開発）にも携わった。

## シャルル・マルヴィル (1813-79)

19 世紀パリの著名な写真家の一人でありながら、1871 年パリコミューンの戦乱で多くの資料が散逸したため、その生涯の多くが謎とされてきた人物。1830 年代には画家、図案家として活動、50 年に写真を始めた。50 年代から 70 年頃までのフランス第二帝政期の都市整備事業「パリ改造」において、変貌する都市の姿を克明に記録した他、ルーブル美術館の作品複写も数多く手がけた。現在ではパリ市歴史図書館にネガがコレクションされている。2013-14 年にワシントン・ナショナル・ギャラリー他で回顧展開催。

## アルフレッド・スティーグリッツ (1864-1946)

アメリカ、ニュージャージー州でユダヤ系ドイツ移民の家庭に生まれる。ベルリン工科大学で写真を学んだ後帰国し、1902 年にニューヨークを拠点にグループ「フォト･セセッション（写真分離派）」を結成。03年機関誌『カメラ･ワーク』を創刊、05 年にはギャラリー 291 を開設して、モダニズム写真や、マティスやピカソ、ブランクーシといったヨーロッパ前衛芸術を紹介した。同時代の芸術に刺激を受け、彼の作風は画像を操作するピクトリアリズムの芸術写真から、次世代に継承されるよりストレートな写真表現へと変貌した。ヨーロッパへ向かう客船の乗客たちをスナップショットによって捉えた《三等船室》はこの時期の代表作である。
10年代前半に美術学校の学生だったエマヌエル･ラドニツキー（後のマン･レイ）は、ギャラリー 291 でセザンヌ、ピカソの作品に出会い、スティーグリッツから前衛芸術の教えを受けている。

## ウォーカー・エヴァンズ (1903-75)

アメリカ、ミズーリ州生まれ。パリ、ソルボンヌ大学で文学を学んだ後アメリカに帰国、1927 年に写真を始める。35-37 年ニューディール政策の一環として FSA( 農業安定局）の依頼によって撮影した南部の農村地帯の記録写真は代表作となった。38 年ニューヨーク近代美術館で写真家として初めて個展を 開催。写真集『アメリカン・フォトグラフス (American Photographs)』を出版。ドキュメンタリー・スタイルによるアートとしての写真を唱え、後代に記憶されるアメリカの本質的なイメージを作り出した。彼はアジェの写真に見られる詩的な性質を評価し、写真の中に込められた時間性の重要さについても 述べている。シャーコフスキーによれば、エヴァンズはアジェの「最大の生徒」であり、「芸術面の後継者」で、「アジェの中に潜んでいた主題を再生した」写真家である。

## リー・フリードランダー (1934-)

アメリカ、ワシントン州生まれ。1950 年代ジャズの音楽家たちのレコードジャケット写真やポートレイトを手がける。60 年代以降シリアス・フォトグラファーとして活動、アメリカの社会的風景に目を向けた写真集『セルフ・ポートレイト (Self Portrait)』(1970 年 )、『アメリカン・モニュメント (The American Monument)』(1976 年 ) 等を発表。ドキュメンタリー写真の新しい可能性を示した。2005 年にニューヨーク近代美術館で回顧展開催。彼はジャック・アンリ・ラルティーグとならんでアジェをモダンアートとしての写真の父と見なしており、初期の作品にはエヴァンズ、ロバート・フランクとともにアジェの影響も見られる。

## 森山 大道 (1938-)

大阪府生まれ。1961 年「VIVO」を目指して上京、翌年、細江英公の助手になる。67 年雑誌『カメラ毎日』で連載したシリーズ〈にっぽん劇場〉などによって 67 年日本写真批評家協会新人賞を受賞。60 年代末から70 年代にかけて『アサヒカメラ』『朝日ジャーナル』等での作品発表、写真同人誌『プロヴォーク』での活動をとおして「アレ、ブレ、ボケ」と呼ばれるラディカルな表現で大きな衝撃を与えた。99 年サンフランシスコ近代美術館、2003 年カルティエ財団現代美術館をはじめ海外での個展多数、一貫して路上から日常の断片をスナップショットでとらえ世界的に高い評価を受けている。パリが少年時代の憧れの街だという森山は、写真家になってからアジェの写真を知り、「現在に至るまで、アッジェの写真への心の追走は止むことがない」と述べている。

## 荒木 経惟 (1940-)

東京都生まれ。1963 年千葉大学工学部写真印刷工学科卒業後、電通に入社。64 年第一回太陽賞受賞、71年に写真集『センチメンタルな旅』(私家版)を刊行、高い評価を得る。自らの死生観とエロティシズムを強く反映したヌード、花、日常の都市風景を撮影し、これまでに 350 冊を超える写真集を 発表。90 年代以降ヨーロッパを中心に海外でも高い評価を受け、日本を代表する写真家の一人となる。72年電通退社後フリーランスになった時、荒木は初めから写真をやりなおすために、東京の街を撮り歩いた。その時の写真を掲載した自著『東京は、秋』(1984年)について、荒木は「やっぱ、〈私情〉がなくちゃね。やっぱりアッジェだね。」と書き、初心に返った時に写真の手本としたのがアジェや、その後継者のエヴァンズだったことを述べている。

## 深瀬 昌久 (1934-2012)

北海道中川郡美深(びふか)町に生まれる。祖父の代から写真館を営む家に生まれ、幼児より写真に親しむ。1956年日本大学芸術学部写真学科を卒業後、コマーシャル写真の分野で活動する傍ら、写真雑誌や展覧会等に作品を発表する。妻・洋子との団地生活を捉えた〈洋子〉や黒く不気味な鴉を心象風景として捉えた〈鴉〉、実家と家族を記念撮影のように断続的に記録した〈家族〉、父親の生涯をテーマとした〈父の記憶〉など、日常的で自己の内面に向かう繊細な視点を特徴とするドキュメンタリー写真を手がける。「アジェは自分自身を写真に投影している」というウォーカー・エヴァンズの見解は深瀬の作品にも共通する。1974 年にはシャーコフスキーと『カメラ毎日』編集者の山岸章二による共同企画展「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラファーズ (New Japanese Photographers)」展に、森山大道、東松照明らとともに出品している。

## 清野 賀子 (1962－2009)

東京都生まれ。1987年、中央公論社に入社し、『マリー・クレール』誌の編集者として活躍。90年代に入ってから写真を撮り始め、95年中央公論社を退社後、本格的な写真活動に入る。代表的な作品集として、千葉、茨城など日本国内の人影のない風景を捉えた『The Sign of Life』(2002年)や、東京を中心に街や人物などにも視点を拡げ、遺作ともなった『至るところで 心を集めよ 立っていよ』(2009年)がある。
清野は生前、アジェの作品を見るのを好み、そのなかに自身の感受性に通じる美意識を見出していた。アジェを「別格」の写真家といい、アジェの、一見したところ作家的意図のない記録であるかのようなスタイルは、その実、写真のなかにある種のヴィジョンを見つけるまで妥協なく撮り続ける「確信犯」のアーティストならではのものだ、と語っていた。

> *確かにぼくは、ウィリアム・クラインやアンディ・ウォーホルの作品にも強く衝撃を受けたけど、それらはいずれも出会い頭のインパクト、つまりヤラレタ！ってものですね。でもアジェの写真はなんかこう、いつの間にかひっそりと、ぼくの身辺に寄りそってくる。（中略）アジェの残した膨大な量の写真全体を見渡せば、その構図のしたたかさや街をとらえる視線のしぶとさに脱帽したくなりますよ。つまりアジェと写真との邂逅は決定的だったと思います。アジェの写真は（中略）、ぼくにとっては、限りなく蠱惑的（こわくてき）な存在です。*
>
> （森山大道『東京都写真美術館ニュース 20 号』1998 年より抜粋）

> *いまアッジェとエバンスとどっちが好きか、イイかと、二人の写真集をさがしたのだがエバンスのしか見つからない。たしかアッジェは三冊あったはずだ。誰かに貸したままなのかな。（中略）んでよー、しかたなくエバンスだけを見る。うーん。ちょっとものたりない。＜情交＞してない。＜私情＞がない。やっぱ＜私情＞がなくちゃね。やっぱりアッジェだね。アッジェさん、エバンスなんかと比べちゃってごめんなさい。格が違うもんね。*
>
> （荒木経惟『東京は、秋』2016 年、 P187『アサヒカメラ』1983 年 7 月増刊号の引用より抜粋）

# 関連イベント

## 関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真を紐解く」

出　演　横江文憲（写真評論家）
日　時　12月8日(金) 18:00～19:30
会　場　東京都写真美術館　1 階スタジオ
定　員　50 名　※当日 10 時より 1 階総合受付にて整理券を配布します。

## 関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真集をめぐって」

出　演　金子隆一（写真史家）
日　時　2018年1月5日(金) 18:00～19:30
会　場　東京都写真美術館　1 階スタジオ
定　員　50 名　※当日 10 時より 1 階総合受付にて整理券を配布します。

## 担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説をおこないます。展覧会チケット（当日消印）をご持参の上、3階展示室入口にお集まりください。

＊事業はやむを得ない事情で変更することがございます

## 展覧会図録

『アジェのインスピレーション　ひきつがれる精神』
東京都写真美術館発行　1,980 円（税込）
テキスト　鈴木佳子（当館担当学芸員）　テキスト再録　横江文憲（写真評論家）

## 開催概要

展覧会名　TOP Collection アジェのインスピレーション　ひきつがれる精神
TOP Collection　Eugène Atget: The Eternal Inspiration
主　　催　東京都 東京都写真美術館
会　　場　東京都写真美術館 3 階展示室　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tel　03-3280-0099　URL　http://topmuseum.jp
開館時間　10:00〜18:00（木・金は 20:00 まで)、ただし 2018 年 1 月 2 日･3 日は 11:00〜18:00
入館は閉館 30 分前まで
休 館 日　毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)、2017 年 12 月 29 日（金）
〜2018 年 1 月 1 日（月・祝）
観 覧 料　一般 600 (480)円／学生 500(400)円／中高生・65 歳以上 400(320)円
※（　）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料　※第3水曜日は65歳以上無料　※1月2日（火）は無料

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当まで連絡ください。
なお、掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース 1 ページ目の
ウジェーヌ・アジェ《日食の間》　1912 年　ゼラチン・シルバー・プリント　をご提供させていただきます。
このリリースに掲載されている作品は、すべて東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。

（ご注意）リー・フリードランダー 《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ》 1983 年は参考図版のため掲載できません。

東京都写真美術館
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tokyo Photographic Art Museum
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp　石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子　平澤綾乃　前原貴子 press-info@topmuseum.jp